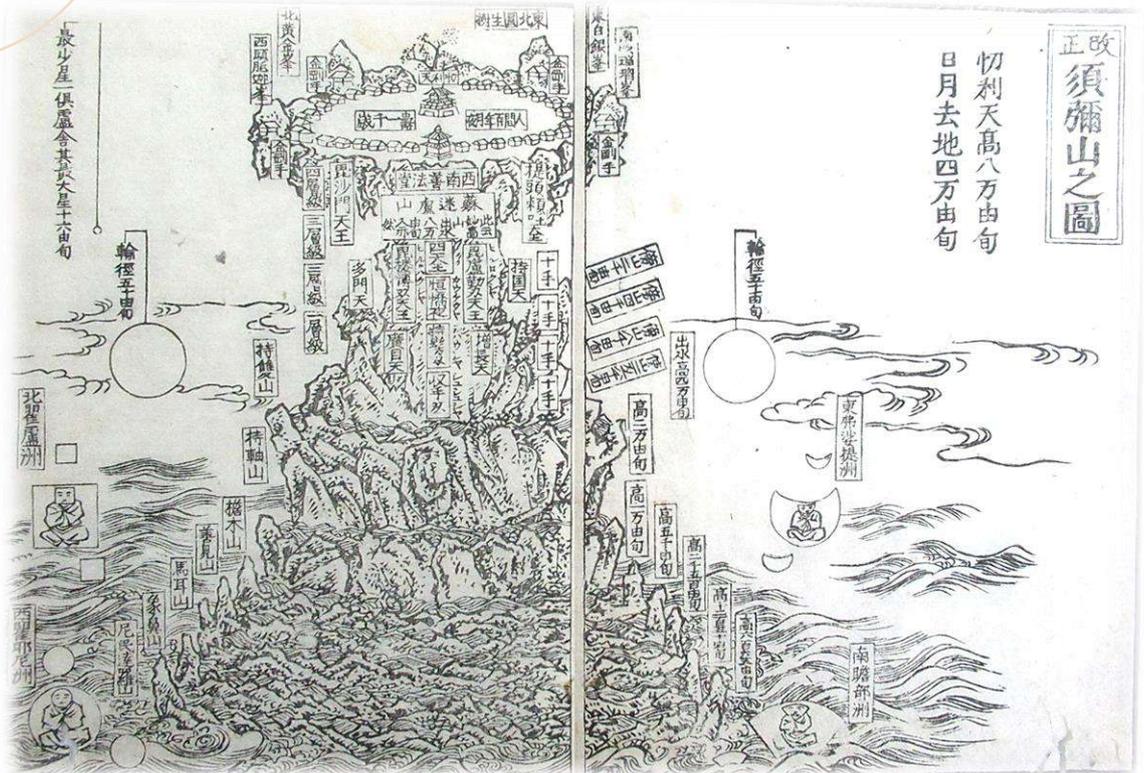


立正大学

古書資料館通信

Vol.7



『須彌山圖解』

目次

古書資料館の文庫	1 頁
明治・大正期の寄贈書	1 頁
寄贈書と文庫の整理	1 頁
昭和・平成期の文庫	2 頁
大正5年の火災と岩瀬志妙の寄贈書	3 頁
被害の報道	3 頁
岩瀬志妙の寄贈書目	4 頁
欠本の扱い	5 頁
残存状況	5 頁
参考文献/注	6 頁
表紙資料紹介	7 頁

立正大学図書館略史 (品川キャンパス) ——古書資料館前史として 第7回

今号では、古書資料館の文庫についてふれた後、大正5年(1916)に起った日蓮宗大学の火災によって、寄贈書がどの程度被害にあったのかを述べていきたいと思ひます。大正5年の火災については、本通信の2号を合わせてお読みください。

古書資料館の文庫

〈明治・大正期の寄贈書〉

古書資料館の蔵書は、ほとんどが寄贈書によって構成されています。まず明治・大正期に、どのような人達がどの程度、蔵書を寄贈したのかを見ていきましょう。記録に残る範囲で、100冊を超える寄贈は以下の表のようになります。

	年月	寄贈者	冊数	出典
火災前	明治26～27年 (1893～1894)	故日薩大僧正記念義損書籍(故新居日薩を記念する文庫)	1771冊 *購入分は除く。	『日宗新報』580
	明治40年 (1907)	故斎藤日意	123種 521冊	『大崎学報』7
	明治42年 (1909)	故本間海解(遺弟総代小林海忍)	221部 1059冊	『大崎学報』10
	明治43年 (1910)	董上追憶会(故小林日董を記念する文庫)	68部 224冊	『大崎学報』16
		千葉県妙厳寺 岩瀬志妙等	315部 1959冊	『日宗新報』1129
	明治44年 (1911)	山口日運	37部 370冊	『大崎学報』20
		故小泉要智の蔵書	91部 222冊	同
	大正2年 (1913)	加藤日栄	50部 357冊	『大崎学報』28
佐野開真		94部 772冊	同	
三津日慧		41部 200冊	同	
火災後	大正5年 (1916)	故藤原日迦の蔵書(日迦遺弟による寄贈)	211部 971冊	『月刊宗報』2
		貞松山蓮永寺の蔵書(丹沢日京による寄贈)	1406部 6761巻	『月刊宗報』2
	大正12年 (1923)	故富田海音の蔵書	約1500冊	『立正大生活』
		故永井日憲の蔵書(石塚鍊慧・馬渡鍊明による寄贈)	約3500冊 (5000冊とも)	『月刊宗報』95(冊数の記載なし) 「図書館三十年略誌」約3500冊 『立正大生活』約5000冊
	大正14年 (1925)	故小林日誠・井上日道・川住存孝の蔵書(小林存慈の寄贈)	595冊	『月刊宗報』99

寄贈者は、いずれも日蓮宗の関係者で、故人の蔵書をその弟子たちが寄贈したり、寺院の蔵書を当時の住職が寄贈したりしていたようです。

〈寄贈書と文庫の整理〉

寄贈された蔵書は、寄贈者や旧蔵者の名前を取って〇〇文庫と名付けられ、個別に管理される場合があります。上記の表の内、現在文庫名で呼ばれるものは、大正5年(1916)に寄贈された貞松山蓮永寺の寄贈書である「貞松文庫」、大正12年(1923)に寄贈された富田海音氏の旧蔵書の「富田文庫」、同じく永井日憲氏¹の旧蔵書である「永井文庫」になります。しかし現在、この3つの文庫を含め、上記の表の寄贈書は、他の蔵書と混配されており、文庫ごとの蔵書の傾向などは把握しにくい状態になっています。

この問題は、当時の図書館の整理方針が関係しています。戦前は、とにかくまとまった一揃いを作ることが重視され、欠巻があれば、寄贈者の別にこだわらず、端本を組み合わせて一揃いにしていました。桜井良策氏²の「図書館三十年略誌」(『立正大学新聞』1933年10月6日)によると、大正5年(1916)の火災によって端本となってしまったものを、他から補って一揃いにするに腐心したとあります。

この証言を裏付ける例として、『録内御書』(請求記号A01/14)を見ていきたいと思ひます。『録内御書』

は、日蓮上人の遺文を集成した大部の書で、目録を除き40巻40冊あります。A01/14は、その大半が明治40年(1907)に寄贈された斎藤日意氏の旧蔵書ですが、その内の巻2・8・23の3冊は別人によって寄贈されたものだと考えられます。巻2には、「紀年新／居文庫／圖書章」の印³があるので、明治26年(1893)頃に寄贈された新居日薩氏を記念する文庫(新居文庫)の1冊でしょう。また、巻8と巻23は、「春達日仁藏」「龍頭日義藏」「清雅」の印が見られます。この内、日仁の印が新しいように見えます。春達日仁が寄贈者なのかは分かりませんが、日仁の印が押されている資料は、現在のところ、古書資料館で50点ほど確認されています。巻8と巻23も、斎藤日意氏の旧蔵書ではない可能性が高いでしょう。

新居文庫は、寄贈当時は別置されていたようですが⁴、大正5年(1916)の火災で全焼したとされています⁵。火災の後に、A01/14に組み込まれたと考えられます。



卷1 卷2 卷8
表紙の色や大きさなどが異なる。



斎藤日意寄贈書に押されている印

当時、図書館は利用のしやすさに重点を置いていたと思います。寄贈本のまとまりを維持するより、欠けない一セットをつくる方が重要だったのでしょう。現在、和漢古書としての扱いを受ける資料であっても、当時は学習のための本としての読まれていたため、それも一つの考え方ではあります。しかし、揃っていること以上に、旧蔵者ごとのまとまりが重要となる場合もあるでしょう。

古書資料館の中でもっとも数の多い寄贈書は、蓮永寺の旧蔵書である貞松文庫です。蓮永寺は、日蓮宗の旧本山の一つで、駿府城の鬼門の方角(現静岡県静岡市葵区沓谷)に位置します。貞松文庫の中には、駿府城下で購入したと思われる本も含まれており⁶、そのことが貞松文庫の特色でもあります。このような文庫は、それぞれを別置するところまでいかないにしても、通覧することができるような目録を作成することが望ましいと思います。解体された文庫の扱いは、今後の検討課題です。

〈昭和・平成期の文庫〉

ちなみに、大正期のものとは異なり、昭和期に寄贈された蔵書には、特殊コレクションとして別置されているものもあります。古書資料館が所蔵するものは、昭和2年(1937)寄贈の望月^{おうちい}鶯溪文庫と昭和37年(1962)寄贈の島田堯存文庫です。

「鶯溪」は、明治・大正期に衆議院議員を務めた望月小太郎(1865~1927)の号です。望月氏は外国通として知られ、各国が新聞・雑誌に掲載した明治天皇の追悼記事を蒐集した、『世界に於ける明治天皇』を刊行したことで知られています。同氏は日蓮上人に帰依しており、故人の遺志により、その旧蔵書が本学の図書館に寄贈されました(右図参照)。また、昭和17年(1942)には、身延山久遠寺に「望月鶯溪碑銘」が建てられています。撰文は若槻礼次郎、書は日蓮宗管長の望月日謙が揮毫したものです⁷。

島田文庫は、神奈川県川崎市の興林山宗隆寺の旧蔵書で、島田堯存氏によって寄贈されました。こちらは、昭和45年(1970)に立正大学図書館から『溝之口宗隆寺島田文庫目録』が作成されています。

『法華』第十五卷三号、一九二八年三月、一〇一頁。

◆故望月小太郎氏遺書寄贈 山梨縣身延出身の前代議士望月小太郎氏が昨年死去されたことは人の知る所であるが故人の遺志に依り和漢英の遺書百六十八部壹千六百五十八冊を鶯溪文庫として立正大学図書館へ寄贈された。

望月文庫と島田文庫は、旧分類の請求記号の頭に「mochizuki」の「m」と「shimada」の「s」が付けられています。なお、望月文庫の内、古書資料館に所蔵されているのは、mAとmDに分類されるものです。

この他、近年文庫として指定され、古書資料館に別置されたものに、河口慧海文庫と石橋湛山文庫があります。

慧海文庫は、河口慧海の旧蔵書を含む資料群です。慧海は、日本で最初にチベットに入国した仏教学者として知られる人物です。解題目録として、『河口慧海請来資料解題目録』（立正大学情報メディアセンター、2013年）と、『河口慧海旧蔵資料解題目録』（立正大学図書館、2018年）が発行されています。なぜ、慧海の旧蔵書が立正大学図書館にあるのかについては、解題目録に収録されている本学仏教学部の庄司史生氏の解説を参照してください。

湛山文庫は、立正大学の学長であった石橋湛山氏の著作を中心としています。今はまだ、数は少ないですが、絶版本や海外で発売された雑誌論文など、湛山研究にとって有用なものを含みます。

大正5年の火災と岩瀬志妙の寄贈書

〈被害の報道〉

寄贈者ごとによる文庫の復元作業を行っていく中で問題となるのが、大正5年（1916）の火災の影響です。火災後に寄贈された蓮永寺の旧蔵書は、現在のところ約1300点5700冊の所蔵が確認できます。記録の1406部と比べて減少していますが、少なくとも半減するような事態にはなっていないことが確認できます。しかし、火災以前に寄贈されたものについては話が別です。

本通信の1号で述べましたが、明治43年（1910）には、火災で燃えた「仮図書館」が竣工しています。明治期の寄贈書は、大正5年時点で仮図書館に所蔵されていたはずですが。一部の貴重書については、別に置かれていた可能性もありますが、それ以外は、すべて火災の被害を受けたこととなります。当時のメディアや雑誌などは、火災による蔵書の被害状況についても報じていますが、具体的な数は記しておらず、各社で微妙な表現の差があります。例えば、「大部分焼失」（『読売新聞』1916年3月9日）、「大半は消失」（『東京朝日新聞』1916年3月9日）、「約三分の一を焼失」（『中外日報』1916年3月14日）、「約半ばを失ひ」（『法華』3巻4号、1916年4月）などとなっています。

この火災被害の実情については調査中ですが、現在把握しているところを述べておきたいと思います。火災前の蔵書数は、図書課作成の目録によって確認できます。火災前の目録については、本通信5号の「分類の話（2）」でもふれました。宗乗・台乗・余乗・和漢の蔵書に対して、以下の目録があります。（1）から（6）の番号は5号で用いた番号と同じです。

- 宗乗 （1）『蔵書目録』（宗乗）、（2）『宗乗部分類目録』、（3）『宗乗部五十音目録』
- 台乗 （1）『蔵書目録』（台宗）、（4）『台乗五十音目録』
- 余乗 （5）『余乗五十音目録』
- 和漢 （6）『和漢書五十音目録』

これらに記載されている蔵書数の合計は、およそ4,000部19,300冊です。一方、火災後はどうだったでしょうか。野村耀昌氏の『立正大生活』（現代思潮社、1953年）によると、大正12年（1923）4月に蔵書の調査が行われたということです。その時の蔵書数は、「永井文庫を含まずに」12,000冊とあります（158頁）。永井文庫は、先にも述べたように、永井日憲氏の旧蔵書、3500冊（5000冊とも）のことです。この12,000冊には、火災後に寄贈された貞松文庫5,000冊（『立正大生活』による冊数）と、藤原日迦氏の旧蔵書の約1,000冊が含まれていると考えられます。そうすると、貞松文庫と藤原日迦旧蔵書を除いた6,000冊が、火災被害を乗り越えた蔵書ということになりそうです。

これらの数字が正しいとすれば、火災によって燃えたのは約13,300冊で、蔵書全体の三分の二に相当します。大部分焼失したというのは言い過ぎですが、半ば以上は燃えてしまったことになるでしょう。

〈岩瀬志妙の寄贈書目〉

次に、もう少し具体的な検証を行いたいと思います。明治期に、最も多くの蔵書を寄贈したのは、千葉県夷隅郡の法受山妙巖寺の住職を勤めた岩瀬志妙氏です。岩瀬氏は、明治2年(1869)11月11日、千葉県夷隅郡西畑村平沢の生まれで、同28年(1895)に第11区檀林を卒業しました。同29年6月に同郡総野村大楠大栄寺の住職となった後、明治42年(1909)7月に妙巖寺へと転任しています。大正3年(1914)には僧都に叙せられ⁸、同14年(1925)1月26日に没しています⁹。

岩瀬氏が、どのような本を何冊寄贈したのかについては、『大崎学報』16(1911年1月)と『日宗新報』1029(1911年2月11日)掲載の書目で確認できます。『日宗新報』には、書目の前に以下の文章が掲載されています(旧漢字は訂正、句読点を補う)。

▲其後引続き図書の寄贈を申出でらるゝもの少からず候。殊に千葉県夷隅郡西畑村、妙巖寺住職岩瀬志妙師は、檀徒総代諸氏の連署を以て内外典に涉り無慮、参百拾五部千九百五拾九冊の寄贈申出られ、既に登録済に相成候。寔に汗牛充棟も啻ならず、左に書目を掲げて、深く巖護法城の篤志を湛え申べく候。

千葉県夷隅郡西畑村妙巖寺住職

寄贈者 岩瀬志妙
同寺檀徒総代
岩瀬清照殿
沢甚一殿
同 沢清宗殿
山口小太郎殿

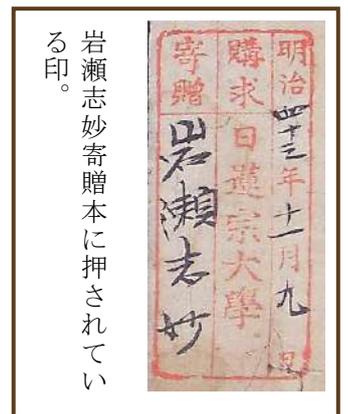
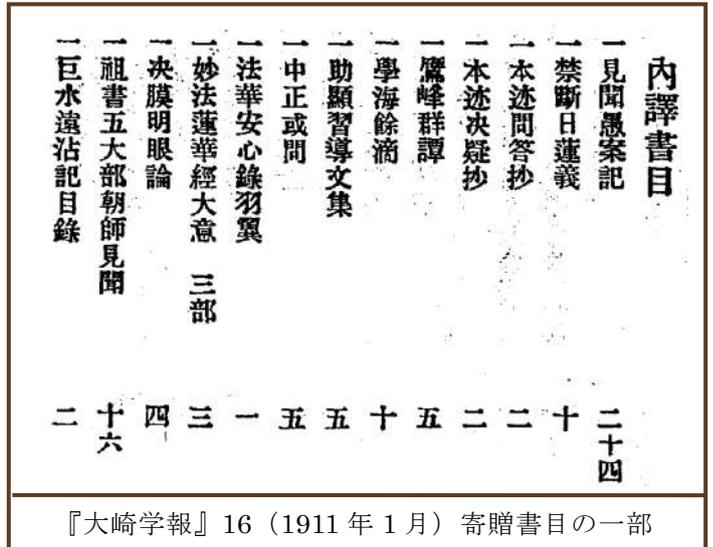
『日宗新報』の方には見られませんが、『大崎学報』の書目の最後には、「右寄贈各位の深志を感謝し併せて本館登録の報告に及び候也 明治四十三年十二月廿一日 日蓮宗大学図書課」とあります。なお、資料に見られる寄贈日は、明治43年(1910)11月9日となっているため(右図参照)、11月9日付で寄贈を受け入れ、図書館の蔵書として登録されたのが12月21日ということでしょう。

寄贈の年月日からすると、岩瀬氏は妙巖寺の住職となって1年に満たない内に、同寺の蔵書を大学へ寄贈したことになります。先にも述べたように、明治43年の4月16日には「仮図書室」が竣工しています。あるいは、新たに出来た図書室のための寄贈だったのかもしれませんが。

なお、寄贈の部数と冊数は、『大崎学報』と『日宗新報』の間で食い違っています。『大崎学報』は280部1434冊を総数とし、それとは別に欠本35部535冊をあげています。35部の書名は示していません。総数と欠本の合計は、315部1969冊となります。

一方、『日宗新報』の方は、先の文章に見るように、総数を315部1959冊としているので、『大崎学報』の合計よりも10冊多くなります。また内訳を、280部1414冊と、欠本・雑本35部525冊としており、合計すると提示された総数より20冊少ない、315部1939冊にしかなりません。なお、『日宗新報』も欠本・雑本の書名はあげていません。

さらに面倒なことに、『大崎学報』と『日宗新報』の書目を数えると、書名の並びがわずかに異なるものの、どちらも282になります。さらに、同一書については、「二部」「三部」という記述が見られるため、



書目の数は重複しない書名の数ということになりそうです。

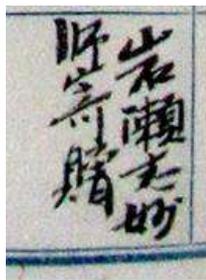
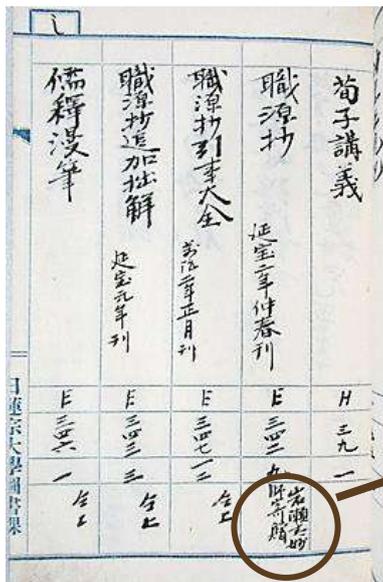
〈欠本の扱い〉

どちらが正しいのか、今となっては不明ですが、重要なのは欠本の扱いです。欠本が図書館に登録されたのかどうかは、火災被害の状況を検討する上でも問題となります。仮に欠本が登録されず、図書館に入らなかった場合、被害状況の基準となる分母が異なってきます。

そこで、図書館に残っている火災前の目録を検査してみましょう。幸いなことに、これらの目録には、備考欄などに岩瀬氏の寄贈本である旨が記録されています。それを元にして計算すると、以下の表のようになります。

分類	部数	冊数	調査目録
宗乗	35部	135冊	(1)『蔵書目録』(宗乗)
台乗	120部	536冊	(1)『蔵書目録』(台宗)
余乗	125部	650冊	(5)『余乗五十音目録』
和漢	10部	108冊	(6)『和漢書五十音目録』
合計	290部	1429冊	

この数は、欠本を除いた 280 部 1414 冊とかなり近いことが分かります。おそらく、欠本の 35 部 525 冊は登録されなかったのではないのでしょうか。その原因は、前節でも述べたように、揃っていないことが重要視されたためでしょう。しかしだからと言って、500 冊あまりの本を捨ててしまったとも思えません。おそらく、足りない巻を加えたり、別の寄贈本の欠けを補ったりする目的で保管されていたのではないのでしょうか。

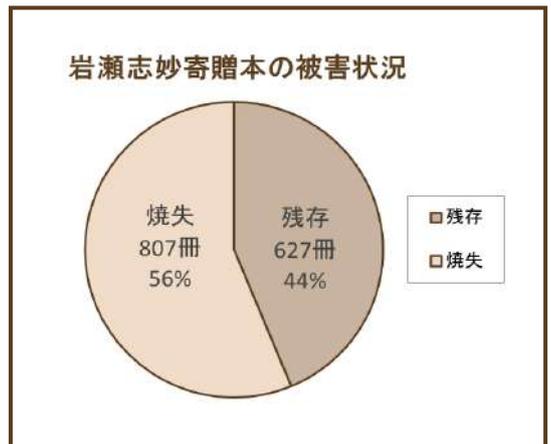


(6)『和漢書五十音目録』
「岩瀬志妙／師寄贈」とある。左の「全上」は「同上」に同じ。「全」は「同」の異体字。

〈残存状況〉

現在、古書資料館に所蔵されている岩瀬志妙氏の寄贈書には、5頁で示した印が押されています。この印や、図書館の原簿などを手掛かりに、岩瀬氏の寄贈書を探したところ、現在 139 部 592 冊の所蔵が確認できています。ただし、原簿を見ていくと、現在不明となっている本が 4 部 7 冊あります。これは火災で焼失したのではなく、後に所在が分からなくなったものです。

また現在、登録されていない未登録本の内、岩瀬氏の寄贈本が 6 部 28 冊確認できました。これらの内の 4 部は、かつて登録していたもので、何らかの事情により登録を外された本の



ようです。この不明本と未登録本を足した149部627冊が、大正5年の火災を免れた数となります。

火災前の登録数を1434冊として考えると、残存率は44%となり、およそ6割が焼失した計算になります。もちろん、欠本の500冊あまりを数に入れば、残存率はさらに下がり、約7割が焼失した計算になります。

当然、置かれていた場所によって被害状況は異なるでしょう。明治26年(1893)頃に寄贈された新居日薩氏を記念する文庫(新居文庫)は、現在112部381冊しか確認できていません。1771冊に対し、2割ほどしか残っていないこととなります。あるいは、火の回りが早い場所にあったのかもしれませんが。

新居文庫が特別だったにしろ、岩瀬志妙氏の寄贈本を見る限り、火災によって半数以上の蔵書が失われたのは間違いなさそうです。

次回は、現存している岩瀬志妙寄贈本を何点か紹介していく予定です。

参考文献

小此木敏明「日蓮宗大学の火災と蔵書—新居文庫を中心に」(『立正大学史紀要』2、2017年3月)。

注

- 野村耀昌『立正大生活』(現代思潮社、1953年)では、「浅草長昌寺から永井日桓氏の遺書凡そ五千冊の寄贈を受け」(158頁)とある。また、桜井良策「図書館三十年略誌」(『立正大学新聞』1933年10月6日)も「斯くして大正十二年一月浅草橋場の長昌寺より日桓師の遺書(約三千五百冊)全部の寄贈を仰ぎ」とあり、寄贈冊数は異なるが、共通して「日桓」の遺書とする。しかし、『月刊宗報』95(1924年2月10日)の「賞状」欄には、「東京府長昌寺住職／権僧都 石塚鍊慧／右者前任職亡永井日憲ノ蔵書ヲ日蓮宗大学図書館へ寄贈シ永井文庫ト称シ研究ノ資料ニ共シタル廉ニ依リ」とある。大正5年(1916)に刊行された、堀由蔵編『大日本寺院総覧』の長昌寺の項目にも、「現住 永井日憲」(名著刊行会の1966年の複製本、上巻125頁)とある。日桓と日憲は同一人物だと思われるが、晩年は日憲を名乗っていたか。
- 桜井良策氏については本通信3号を参照。
- 本通信1号を参照。
- 「故日薩大僧正紀念義損書籍募集」の趣意書中に、「義損書籍を募集し新居書籍函を新造し之を大檀林図書館に納め長く之を保存して」とある(清水龍山編『新居日薩』日蓮宗宗務院、1937年、1130～1131頁)。また、「新居文庫有志義納統計略表」に、「書物箱製造費」がある(同、1140頁)。新居文庫は、他とは別の書籍箱に入れられていたと考えられる。
- 清水龍山編『新居日薩』(日蓮宗宗務院、1937年)に次のようにある。「以上によつて新居文庫、新居書籍に、凡二千二百冊と黄檗版蔵経十函との収蔵せられたことが分かるのである。大正五年の失火によつて、悉く烏有に帰してしまつたのは、まことに残念なことであり、哀惜に堪へないのである。重ねて関係者御一同に深厚の敬意を表する」(1140～1141頁)。
- 「駿府四足町厂金屋 臼井」の印が押されている蔵書や、駿府城下で木活字本を出版していた採選亭の蔵書が複数みられる。小此木敏明『立正大学蔵書の歴史 寄贈本のルーツをたどる 近世駿河から図書館へ』(立正大学情報メディアセンター、2013年)を参照。
- 建碑記念として刊行された、望月小太郎稿、望月清矣校『鶯溪遺稿』(春光社、1942年)に、碑の写真や全文の翻刻がある。
- 井上泰岳編『現代仏教家人名辞典』(現代仏教家人名辞典刊行会、1917年)、58頁。なお、『日宗新報』600(1896年6月18日)によると、明治28年の檀林卒業時の肩書きは、妙音寺住職とある。また、『日宗新報』1078(1909年9月11日)の「住職進退」の記事では、明治42年(1909)7月23日付で妙巖寺住職となっているが、同日に「大栄寺兼住」とあるので、大栄寺の住職も兼ねたと思われる。
- 『月刊宗報』96(1925年3月10日)の「死亡」欄による。

* 明治・大正期の雑誌の引用に際しては、旧漢字を現行の字体へと訂正した。また、『日宗新報』の号数は通号表記に統一した。

立正大学古書資料館専門員 小此木敏明



表紙資料紹介

須彌山圖解 1冊 22.3×15.8cm A74/107

高井伴寛思明〈高井蘭山〉述。江戸、花屋久次郎、文化6年(1809)序。

裏見返しに花屋久次郎の広告がある。その中で、本書の内容を「仏教の天文を儒家の天文に引合せ和解し天竺の時候を述」と説明している。表紙の須弥山は世界の中心にあるという高山で、仏教の世界観に基づくもの。



立正大学古書資料館通信

第7号

平成30年11月30日発行

編集・発行 立正大学図書館 品川学術情報課

〒141-8602 東京都品川区大崎4-2-16

TEL: 03-3492-6615

HP: <http://www.ris.ac.jp/library/>